

河童のお皿

2009.02.08

大変なことになりました。

替え皿を 失くしてしまったのです。

河童のアタマには、お皿が乗っていて、
そこには お水が入っていることは、よく 知られています。

このお皿、生まれてから死ぬまで、ずっと 同じお皿が乗っている、
と、思うでしょう？

ところが 違うんです。

河童は、おとなになると、替え皿を持つことが 許されます。

ニンゲンの目からは 同じようなお皿に見えたとしても、
実は お洒落な 河童たち。

それぞれが 吟味した数枚の替え皿を、
大切にお手入れしながら、とっかえひっかえ アタマに乗せているのです。

さて、大変です。

替え皿を 失くしてしまった そのカッパには、
いま アタマに乗せているお皿しか 栄養補給の手段が ありませんでした。

実は、お皿には、蓮の花水という、河童にとっての栄養ドリンクが
入っているのです。
それが、ニンゲンには お水のように見えるんですね。

これ以上 詳しいことはね、
河童の秘密ですから、ここには 書けません。

だけど、おとなの河童にとって、
替え皿がない、というのは、致命的なことなのです。

河童は、栄養が 足りなくなると、どうなるか ご存知？

体に、苔が生えてしまうのですよ。

びっちり、体に 貼りついた苔。
その苔は、自分では 取り除けないものでした。

数日のうちに、カッパの体に貼りついた苔は ぎっしりと根を張り、
はがすことが できなくなってしまいました。

苦しいよお。

カッパは、泣きました。

苔が くっついていて、体中が 痒いんだよお。

カッパは、もがきました。

お陽さまの光に当たるのも つらくて、
カッパは、沼の奥深くへ もぐりこみ、静かに 静かにしていました。

もう、いいかな。

なんども、なんども、
浮上しかけては、あまりの つらさに
また 深く 沼の底へ 戻る。

そんなことを 繰り返し…

地底の生活だって 楽しいもんさ♪

と、表面では 明るく振舞いながらも、
ほんとは 泥沼に 足を取られ、苦しみあがく数日間が
続きました。

ある日のことです。

久しぶりに、カッパのお友達が やってきました。

たまたま 通りかかったカラスが、
カッパのことを思いだして、沼のほとりで、カッパの名を呼んだのです。

やせ細り、全身 苔だらけになった カッパが 上がってくると、
カラスは、驚きました。

どうしたんだい？
その姿。

実は、替え皿を 失ってしまったんだよ。

カッパは、見るからに 苦しそうでした。

ちょっと 待っていて おくれよ。

カラスは、カッパの体に びっしりと張り付いた苔を
くちばしで つつきはじめました。

苔は カラスの大好物。

カッパが 自分では はがせなかった苔も、
カラスのくちばしによって、みるみるまに キレイになりました。

カラスくん、助かったよ。
どうもありがとう。

カッパは、深々と アタマを下げました。

カラスは、カッパのアタマを見て、また 驚きました。

なぜなら、
カッパのアタマには、お皿が 乗っていなかったからです！

替え皿だけでなく 本皿まで 失くしていたのでは、
体中が 苔だらけになるのも、当然です。

カラスも、いままで 苔に 気をとられ、
お皿のないことには まったく 気づいていなかったのです。

か、か、カッパくん。
きみ、大丈夫なのかい？

カラスは、くちばしを ガタガタ いわせました。

カッパは、弱々しく、しかし 笑顔で うなづきました。

ああ。

きみが 苔を ぜんぶ 食べてくれたからね。

もう 大丈夫さ。

い、いや…

そ、その…

きみのアタマの上には、皿が ないぜ？

どこへやってしまったのさ？

皿がなくても、きみは 大丈夫なのかい？

矢継ぎ早やに質問する カラスの言葉に、
今度は カッパが 仰天しました。

う、嘘だ！

ぼくのアタマに お皿がないわけ ないじゃないか！

ぼくたち 河童は、蓮の花水がないと

生きていけないんだもの！！

しかし、それは 本当でした。

カッパのアタマに、お皿は なかったのです。

絶対になくってはならないもの。

それが 河童のお皿でした。

とても大切なものだから、替え皿まで 用意してあったのです。

だけど、それが、いま、アタマの上に、ない。

それなのに、自分は、生きている。

カッパは、呆然と 立ち尽くしていました。

そこへ、カエルが やってきました。

あんたたち、なに 騒いでんのさ？

真っ青になっている カッパの代わりに、
カラスが 羽根を ばたばたさせながら 説明しました。

カエルは、驚きませんでした。

ああ、だって・・・
カッパくん、自分で 皿を落としていたじゃん？

ええええ？

ええええ？

カッパと カラスが ふたり いっぺんに 声を上げました。

カエルの見たところによると。

いつの晩だったか、カッパは、
ふらふらと歩いているうちに つまづいて 転び、
そのときに、アタマから お皿が 落ちたのだそうです。

が、カッパは、お皿を落としたことなんか どうでもいい
という顔で 起き上がり、
また ふらふらと 立ち去った、ということでした。

あんた、もう必要なくなったから、
お皿を落としたんだと思っていたけど？

とんでもない！！

僕たち 河童は、お皿がないと生きていけないの、カエルさんだって 知っているでしょう？

でも、生きてるじゃん☆

カエルは 空を見上げて、おかしそうに ケロケロと笑い、なめらかな喉を ひくひく させました。

生きてるじゃん。

ま、あんたのアタマの上に、皿があろうと なかろうと、わたしらにとっては どうでもいいことだけどねっ

たしかに……

カッパは、生きていました。
お皿がなくなっただけ、たしかに 生きていました。

そして。

【お皿があるからこそ 河童である。】
と信じていたにすぎなかったのだ、ということ
認めざるを得なくなっていました。

替え皿だってさ。
もう要らなくなったから、失くしたんじゃないのかい？

カエルは もういちど、空を見上げて ケロケロと 大笑いすると、ぴょんぴょん 跳ねながら 遠ざかっていきました。

残された カッパとカラスは、顔を見合わせました。

ぷっと カラスが 吹き出しました。

そういえば…さ。

カッパくん、お皿がないほうが、オトコマエだよ？

ほ、ほんと？

カッパが ちょっと 照れつつも 池の水面に 姿を映してみると、
すっきりとした顔の お皿のないカッパが 目をまあるくして
こっちを 見ていました。

…うん。

ぼく、この姿、気に入ったよ。

お皿のなくなったカッパは、にっこりしました。

あ、カラスくん。

せっかく 来たんだ。お茶でも 飲んでいってよ。

蓮の花水が まだ 何本か残っているんだ。

苔を取ってくれたお礼に、美味しいお茶を、淹れるよ。

おっ。

それは いいねえ。

カッパとカラスは、草をかきわけ、カッパの家へと 入っていきました。

一部始終を見ていた 池の水が、
お皿のない河童第1号を 称えるかのように、
きらきらと輝いていました。